

葛飾区史編さんだより

270219

Vol.11

総務部 総務課 区史編さん担当係 03-5654-8444
郷土と天文の博物館 03-3838-1101

葛飾区



平成 26 年 11 月 15 日(土)午後
2 時から、柴又地区センターにて「昭
和葛飾を伺う会」が開催されました。
多くの方にご参加いただき、柴又に
まつわる様々なお話を伺うことがで
きました。



帝釈天の参道

帝釈天(題教寺)の参道は柴又の駅から山門にむかっ
てやや湾曲しています。曲がっている理由はどのようなもの
なのでしょう。

帝釈人車鉄道が柴又と金町の間を行き来していたの
は明治 32 年から大正元年の間です。当時の写真で確
認すると、現在の参道には建物は見当たりません。

そのころの地形図で確認すると帝釈人車鉄道の軌道と
帝釈天の間は耕地だったようです。柴又の参道につい
て、かつては人が集まる庚申の日だけに店を出し、その
ほかの日は、ほとんど店がなかった、という話を聞くことが
ありますが、まさに耕地の中の寺という感じです。

帝釈天の参道が現在も湾曲しているわけは、もともと農
道だったところに家が建っているからのようです。葛飾区
内には農地がなくなったのちも、農道をそのまま生活道路として使っているところがいくつもあります
が、観光客がひしめく柴又帝釈天の参道ももとは農道であったというのは少し驚きです。

帝釈天の庚申縁日は、帝釈天で日蓮上人が自ら刻んだといわれる板本尊が発見された日が庚申
の日であったことに由来しています。庚申の日は十干十二支で日を数えると六十日に一度やってき
ます。

庚申の日に行われる民俗行事には庚申講があります。庚申講は全国あまねくひろまっていますが、
関東地方には特に多く、江戸時代に流行した民間信仰です。庚申の日に集まって夜話をしながら
飲食して過ごすというのがその内容です。

こうした講の内容は道教に由来したもので、庚申の日の夜に、寝ている間に人間の体から三尸(さん
し)の虫と呼ばれる虫が出て行って天帝に人間の悪行を伝えにいくことがあるので、その夜は夜通
し起きているという由来譚に基づいています。葛飾区内にも多くの庚申塔が所在しています。その多
くは江戸時代のもので、区内でも江戸時代には庚申講が盛行したことがしのべられます。

帝釈天の庚申縁日は庚申講とは直接関係がありませんが、南関東一円から集まる信者はこうした
庚申信仰に関する知識を持っていたと考えられます。

帝釈天の庚申縁日の前日を宵庚申といいました。かつては、この宵庚申から帝釈天に参拝する人
が多く、庚申纏の出し物も参道に繰り出されてたいへんにぎわいました。宵庚申にやってきた信者た
ちは、それぞれひいきの料理店で食事をしたり酒を飲んだりして思い思いの時間を過ごします。そし
て朝一番に帝釈天にお参りし、ご利益を求めました。



帝釈人車鉄道路線から帝釈天山門をのぞむ

江戸川の水練場

金町などの伺う会でも、子供のころ江戸川で水泳をしたことなどをお聞きしてきました。また四つ木の座間銀蔵氏が撮影された昭和 12 年の写真には現在の矢切の渡し付近にあった水練場の様子が写されています。この写真によると江戸川の水練場を運営していたのは江戸川風致協会という団体であったようです。



江戸川・荒川には水練場があって子供や水泳が出来ない人のための稽古場にもなっていました。また、戦時中一時期ですが中川の高砂付近にも、海軍に入営する人のための水練場が設けられていたようです。

ところが、今回の柴又の伺う会では、昭和 2 年生まれの方から「江戸川で水泳をすることは禁じられていた。」という意外なお話を聞きました。柴又小学校には昭和 10 年代には町の篤志家が出資して作られた立派なプールがあり、それを使っていたので江戸川では泳がなかったというのです。とすると、写真にも写っている矢切の渡し付近の水練場は、ほんのひととき設けられたものだったのかもしれない。

川や池など水辺に関する人々の記憶は、葛飾区の先人たちの自然との関わり方の変遷を示す資料ということが出来ます。今後も多くの人たちの水辺に関するお話をお聞きしたいと思います。

亀戸大根の出荷

亀戸大根は現在市場に出回することは少なく、一般の人たちにとっては幻の大根になっています。柴又では、昭和 20 年代までこの亀戸大根が盛んに作られました。亀戸大根は秋まきの大根で、11 月上旬に種をまきます。現在では、ビニールでトンネル状の霜よけを作りますが、かつてはよしで亀戸大根の苗を覆いました。3 月下旬から 5 月上旬にかけて東京の神田市場や築地市場に出荷しました。

昭和 20 年代は、まだトラックなどは少なく、牛車やリヤカーなどに乗せて歩いて神田や築地へ出荷します。連日朝 2 時ごろに家を出て、市場に明け方に到着します。帰りは昼近くになるので、都心の食堂でお昼ごはんを食べるのが楽しみでしたが、毎日の激しい労働で体は消耗していきます。

「車を引きながらいつのまにか寝ていた。」と、当時、市場に亀戸大根を連日出荷していた人は語ります。一年を通じて毎日夜半に起きて市場へ野菜を出荷し、帰ってきてまた野菜を出荷する準備をするという仕事を行うことは、柴又のような近郊農村では当たり前のことと受け止められていますが一般的な農村ではまずないことです。こうした労働時間のサイクルや行動範囲の広さなどが生活全般に与えた影響は計り知れないものがあるように思われます。

八幡神社の三匹獅子舞

柴又の八幡神社の三匹獅子舞は、現在も神社の例祭の前日に行われています。午前中から夜は 20 時ごろに至るまで続く、長丁場の芸能です。葛飾区指定文化財になっているこの獅子舞は教育委員会によって記録映画も作られています。

毎年 10 月に入ると獅子舞の稽古が社務所で行われます。かつては柴又に生まれた長男だけがこの舞いを伝えることを許されていましたが、現在では多くの人たちに伝えられています。お祭りの稽古もいまは和気藹々とした雰囲気で行われます。



昭和 20 年代は、子供が多く社務所で行われる稽古も熱気あふれるものでした。ちょっとでも気を抜くと「お前はもう明日からなくていい。」と教える方もたいへん厳しかったそうです。楽しみは現在も続いている稽古が終わったあとのおにぎりです。とくに昭和 20 年代初めはまだ食糧事情が悪く、おにぎりが出るのが楽しみで、時には奪いあいになることもあったそうです。